

平成25年度第3学期始業式 校長式辞

H26. 1. 7 (火) 9:40~体育館

おはようございます。そして、新年おめでとうございます。

2014年、平成26年は午年（うまどし）です。馬の「後ろ足で強く蹴って疾走する」イメージのように、みなさんが今年一年、未来に向けた道のりを力強く駆け抜けてくれることを願っています。

さて、今日は、2つのお話をしたいと思います。

1つ目は、「心のスイッチをONにすること」についてお話しします。

偉大な教育者であった東井義雄（とうい・よしお）先生は、『自分は自分の主人公』という題の詩を残されています。私の好きな詩の一つです。紹介しましょう。

「自分は 自分の 主人公
世界でただ一人の自分を
光いっぱい自分にしていく責任者
少々つらいことがあったからといって
ヤケなんか おこすまい
ヤケをおこして
自分で自分をダメにするなんて
こんなバカげたことってないからな
つらくたってがんばろう
つらさをのりこえる
強い自分を 創っていこう
自分は 自分を創る責任者なんだからな。」

自分を創る責任者は自分です。親御さんでもない。先生や友人でもない。自分自身です。みなさんは今、「する人」になっていますか？「させられる人」になっていませんか？人は元来強くない存在だからこそ、自分で決めたことを忘れず、小さな実践を積み重ねながら、日々反省することをし続ける必要があると思っています。それを怠ると、自ら努力しなくなり、「する人」から「させられる人」になってしまう危険性があります。その意味で、「する人」とは、自らが決めたことの結果に責任を持つ人だと思います。みなさんには、今年一年、光

輝く自分を創っていける学校生活を、心を込めて送ってほしいと願っています。

もう一つ、東井義雄先生の「心のスイッチ」という題の詩を紹介しましょう。

「人間の目は ふしぎな目
見ようという心がなかったら
見ているも見えない。
人間の耳は ふしぎな耳
聞こうという心がなかったら
聞いていても 聞こえない。
おなじように先生の話聞いても
ちっとも聞こえていない人がある。
ほんとうにそうだと
腹の底まで聞く人もある。
同じように学校に来ていても
ちっともえらくなれない人がある。
毎日ぐんぐんえらくなっていく人もある。
今までみんなから
つまらない子だと思われていた子でも
心にスイッチがはいると
急にすばらしい子になる。
心のスイッチが人間をつまらなくもし
すばらしくもしていくんだ。
電灯のスイッチが
家の中を明るくもし、暗くもするように。」

大多数のみなさんは、今、自分の可能性の実現に向けて、日々の生活を前向きに送ってくれています。が、中には自分の可能性に自ら制限を加えたり、前向きに努力することを投げ出している人も見受けられるようです。もし、弱気になっていたり、あきらめていたり、マイナス思考になりかけていたら、自分の弱さや甘さ、怠惰に負けてはいけなさと自分を奮い立たせる必要があります。それには、まず達成可能な小さな具体的目標を設定し、自分の「やる気」を引き出しましょう。目標達成に向けて、小さな一歩をとにかく踏み出すことが大切です。そして、プラス思考に切り替えられれば、歯車がよい方向に回っていくと思います。

心のスイッチは誰もが持っていますが、スイッチをONにするのは自分です。心のスイッチが入らないことを人のせいにしてはいけませんね。自分が自分を創っていく責任者なので

すから。スイッチを入れなくては、みなさんの持つすばらしい可能性も単なる可能性で終わってしまいます。大切なことは、可能性の実現に向けて具体的な動きを取ることです。その行動をする決断をし実行に移す、すなわち心のスイッチをONにするのは、他の誰でもなく、みなさん自身です。自分を仕上げる責任者はみなさん自身なのです。

次に、二つ目は、「チームの一員として1秒を削り出すこと」についてお話しします。

1月2日・3日に行われた第90回箱根駅伝の優勝校、東洋大学駅伝部の事例をもとに考えてみましょう。

今年の箱根駅伝は、東洋大学が歴代2位の記録で、2年ぶり4度目の総合優勝を果たしました。往路、復路ともに優勝の完全優勝でした。

東洋大学は、前々回(2012年)、「山登りの5区」で1年次から連続区間賞をとり、「新・山の神」と呼ばれた柏原竜二(かしわばら・りゅうじ)選手を擁し、2位に大差をつけて優勝しました。柏原選手が卒業し、初めて臨んだ前回(2013年)は2位でした。新チームのスタートは、翌朝、1月4日の午前5時30分。朝練習から、気持ちを箱根に向けたそうです。

夏前には「高いレベルの空気感」を出すため、(酒井)監督は駅伝メンバーを15人前後に絞りました。早い時期に主力と控えを線引きすることでチームワークの崩壊を招きかねないが、雰囲気を変える必要があったと言います。結果、箱根の登録メンバー16人は、過去にないほど高い水準になりました。柏原選手が抜けて、出雲駅伝、全日本駅伝を含めた大学の3大駅伝で5連続2位だったチームが、今回、ついに優勝を勝ち取ったのです。「選手は、心が折れそうになったと思う。今日は、闘争心あふれる走りを見せてくれた」と、監督は復路を終えて優勝を果たした選手たちを称えました。

5区を任されたのは主将の設楽啓太(したら・けいた)選手。「最後ぐらいは、主将らしい走りを見せつける」。そう心に誓っていたから、初めて挑む山登りは怖くなかったそうです。東洋大学が王者に返り咲くためには、5区で走れるランナーがどうしても必要でした。啓太選手は細身で、向かい風にあおられる可能性を考えると山への適性は未知数でした。が、「走力ではチームで一番で、登りは苦手ではない。ラスト5キロからの下りでリードを広げられる。何よりも彼には、つらい山登りの5区と向き合うだけの使命感がある」と、監督は話していました。

3区の区間賞でトップを奪った双子の弟・悠太選手の頑張りもあり、啓太選手は主将の意地を見せました。結果は、自身初の区間賞で往路優勝を引き寄せました。「きつくても、みんながゴールで待っていてくれる。チームに勢いを付けられたと思う」と、走り終えたあと、

輝いた表情で話していました。

5大会2位に甘んじ、勝ちきれない理由は何か、部員と話し合いを続けるうちに、見えてきたもの。それは、試合でも日常の生活態度でも、人任せにするチームの姿だったそうです。そして、「全員が自分で決める覚悟を持つこと」を目標に、物静かだった自らを変え、口うるさく部員を叱咤するようにしたそうです。結果は今大会出場した10人全員が区間4位以内をマークし、うち5人が区間賞。「全員がベストを出せた」と、啓太主将は優勝インタビューで話していました。

独走でゴールに戻った10区のアンカー大津選手は、左手の甲に書いたチームスローガンを、笑顔で指しました。「その一秒をけずりだせ」——。5人のランナーが少しずつ削り出した1秒1秒が、やがて大きな流れになり、復路新記録の圧勝につながりました。復路スタート時点のリードは59秒ですが、ゴール時には2位に3分35秒もの差をつけての圧勝でした。「9区を終えた時、優勝できると思った。走力以外の成長が、この結果につながったと思う」と、監督は述べています。

この事例から言えること。それは、部員一人ひとりが1秒にこだわりながら練習を続け、精神的に強くなるとともに、強い責任感、使命感を身に付けたからこそ、優勝を勝ち取れたということです。みなさんに伝えたいこと。それは、一人ひとりが「チーム春女」の一員として、1秒を削り出す努力を重ねてほしいということです。一人ひとりの1秒が結集して、春女全体の大きな流れにつなげられればすばらしいですね。今年一年、学習でも、部活動でも、委員会・生徒会活動でも、学校行事でも、このことを意識して取り組みましょう。

最後になりますが、この冬休み、それぞれが有意義に過ごしてくれたと思います。一年で最も寒い時季に辛さに耐え、己（おのれ）と戦い、仲間と励ましあって取り組んだことは、きっと成果となって表れることでしょう。熱心にご指導くださった先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

3学期は短く、あっという間に過ぎていきます。だからこそ一日一日を大切に過ごしましょう。みなさん一人ひとりにとって飛躍の年になるよう、そして春女にとっても大きく飛躍する年になるよう祈念いたします。

春女生一人ひとりが持っている潜在能力が十分に発揮されるよう、先生方には引き続ききめ細かなご指導をよろしくお願い申し上げます。